



ひずむ空間



pinokopapa

都心から出来るだけ早く離れる。私は混乱する頭で懸命に考えた。そして、高速は使わず、一般道を西へ走った。ビル街を抜け、下町の風情の中を走り、野原が見えた。一気に100キロほど走っていた。私には止まる余裕がなかった。しかし、こんな時でも体は意志と無関係に動く。喉の渇き、空腹、便意、なんなんだ、これは！私はこのときになって強烈に腹立たしく思った。自分をどう思っているか、そこらの犬と同じで食わなければならない、出さなければならないんだ。そう思って、私は目に付いたパーキングエリアに車を止め、トイレに走った。人はいない。それは解っていた。しかし私はトイレでドアを閉めるのをためらった。閉めれば閉じ込められてしまう。そんな気がした。兎に角大急ぎで用を済ませ、私は手を洗い、車に戻った。私が停めたところに私の車がある。一台も止まっていない、広いばかりの駐車場で、私は何となく空恐ろしさを感じた。

私は周りを見回し、車に座った。コンビニで買った朝のおにぎりとお茶がある。それを私はむさぼり食った。何が起きているのか解らなかった。次元がずれて、私一人そこに迷い込んだ、・・・、いや取り残された、そんな気がした。ここはどこまでも開放された閉鎖空間であり、無限軌道の一点の上を無限の先まで走らされている、そんな気がした。距離は最初長さで測られる。しかしどこかの地点で、時間で表現される。何キロではなく、何時間とか何光年とか。今私はどこまで来たのだろうか。一メートル先？何万光年先？腕時計だけが過ぎた時間を示していた。

日が落ちようとしている。私は先を目指した。とは言っても、ただ走ってきた方向の先へ向かっただけだが。私は闇雲に走って、地方デパートの駐車場に車を乗り入れた。車を置き、上に上がる。明るく照らされたフロアを巡る。上質のスーツにブランド物の時計。私は思いついたことがあった。一つ何百万の品物を並べたショウケースを、そのあたりの金属椅子で叩き割った。非常ベルが鳴る。防犯カメラも私を写している筈だ。私はネックレスやリング、高級腕時計をポケットにねじ込んだ。次のショウケースも同様に叩き割る。次も、次も、と割ってゆく。さあ、誰でもいい、私を捕まえに來い。次々と取って行くぞ。ガラスの割れる音が続く。中に手を突っ込んで宝石をポケットに押し込む。入りきらずに下にこぼれる。ガラスの破片を踏みつけて軋るような音がする。ジャラジャラと金のネックレスの落ちる音もする。私は絶望的になり、次々とガラスを割っていった。

誰も來ない。

私は地下に降り、食品売り場で果物に手を伸ばしてかぶりついた。高級ワインの栓を

抜き、ラッパ飲みした。頬に涙がつたって落ちた。それは真っ黒な色をしているように思えた。

翌朝私は車で寝ていた。体から、胸の悪くなるようなワインのにおいがした。今私がどこにいるのか思い出した。どこかへゆかなくっちゃと思った。私は上の階へ上がっていった。どこかに従業員用のシャワーなんかがあるはずだと思ったからだ。私は目に付いた品物の中から、真新しい下着と洋物のスーツに靴を手に提げ、シャワー室を捜した。そしてシャワー室を見つけ、着ていたジャケットを脱ぎ捨てた。きらきら光る石、重みのある品のいい腕時計が幾つも床に転がった。そんなもの、もうどちらでも良かった。熱いシャワーが心地よい。私の中で何かが、幾つも欠けていった。体を拭き、洋物のスーツを着ようとして、私は笑った。そんなものは床に叩きつけ、私は下着姿でフロアを歩き回った。そしてジーンズとセーターを着込み、スニーカーをはいて下に降りた。手には食料を持っていた。

もう私には、ここには人がいないことは解っていた。この模造された世界で、人と言えば私だけ、そして動物というのも私だけと解っていた。そよぐ風に草花が泳ぐ。私は無人のガソリンスタンドで給油する。満タンになると、事務所を一応覗いてしまう。無人を確かめ、また走り出す。私一人しかいないこの世界で、私はなんなのだろうと考えてしまう。人と認識するのは私だけしかいないこの世界では、なんの意味もなく思える。しかし 以前の世界 でも他の動物は人を 人間 と認識していただろうか。飼い犬にとっては餌をくれる物、なでたり擦ったりしてくるもの、といったところか。そのときの 人間 て何？

私の心から様々なものが抜け落ちてゆき、凶暴な衝動だけが残った。私の流浪が始まった。他のいない ここ では私は支配者である。独裁者でもある。しかしそれは物に対してだけで、存在しない 人 を支配は出来ず、それゆえ独裁も成立しない。地位も名誉も権力も同じ。殺す相手が存在しなければ自然命題の 殺すなかれ も無意味だ。ほかにも ここ では 十戒 は在りようもない。誰が私をこんなところに閉じ込めたのか。

神の事なんか、大い過ぎてわかりゃしない。

しかし私はどこかで 地獄の門をくぐったらしい。だがウエルギリウスもベアトリチェもおらず、あるのはロシュナンテだけだ。私は凶暴な気持ちのまま、車で走った。腹がへれば、店に入って食い散らかした。銃を手に入れると美術館で打ちまくった。美なんぞ、なんだというのか。私しかそんざいしないのに、美 は 美 であることで自分を誇るのか。私はその傲慢さに、破壊せずにいられなかった。 美 も 善 も 悪 すらもない ここ は、人 の作った価値なぞ形もなしていなかった。

私は、蒼ざめた馬に乗ることにした。赤、黒、白、そして青ざめた馬の騎士は剣、飢饉、死、獣。私は凶暴な衝動のまま蒼ざめた馬に乗り、ロシュナンテを捨てた。しかし、何に怯えなければならないのか、後ろの座席に散弾銃と拳銃を持っていた。そして次の町に着くと、その度に強奪、略奪を繰り返した。・・・いや、それを所有している他者はおらず、望めばそれは私のものだから調達したに過ぎないが、必要なものを確保すると、後は焼いた。ほんのちょっとした行為で町は消失した。私は侵略したのではない。そこにあるものを破壊しただけだ。

それを繰り返すたびに、私は蒼ざめた馬の意味に気付かされた。脱出する際彼女の家に駆けつけたが、その時感じた違和感の正体が解った。彼女の机の上にいつもあった二人の写真がなかった。それと、鏡がなかった。そんなもの、今もどこにもない。私は私を確かめるものがなかった。この世界は、虚無だ。赤の馬でも、黒の、そして白の馬でもなく、私は蒼ざめた馬に乗っていた。

私は引き返した。乗り捨てたロシュナンテは、そのままそこにいた。ロシュナンテに乗り換えた私は、何故蒼ざめた馬に乗ったか解らなくなった。あれに乗り換えたのは、私の意志ではなかったような気がした。ともあれ私はロシュナンテに乗り、エンジンをかけた。どれほどの時間、放っておいたか解らないが、エンジンは以前の通り動いた。これは私のものだ。バックミラーに私の眼姿が映る。破壊ばかりを繰り返してきた私は、私の内部でも破壊が起こっていたことを知った。

神なんて大いなるものの事は解らない。

私はこの中では意思だ。

そんな言葉を繰り返しながら、ロシュナンテの中で目が醒めた。私の思考とは裏腹に、私は甘美な思いで泣いていた。峠の中腹の野原にロシュナンテを止め、私は眠っていた。父母がいるはずもないのだが、私は故郷に向かう途中だった。私は頬を拭い、外へ出た。眼下に町が見える。振り返って、私はロシュナンテを見、野原を見た。向うに古民家が見える。一目で廃墟とわかった。

廃墟の戸を開け、中を覗くと古くさく、黴臭いにおいがした。ここはそのまま時の中に沈んでいたようだ。私はロシュナンテに戻り、出発しようとしたが、エンジンがかからない。一端車の外に出て、周りを見渡してみた。車ならいくらでも手に入る。だが旅は終わったようだ。

もう一度廃墟に戻り、中を見直した。そして靴のまま中に入り、座敷に上がって雨戸を開け放った。この中の何も彼もが置き去りにされ、埃を被っている。囲炉裏は自在鍵がかかり、畳に砂埃が。人の生活に使われていた物の時間が止まってそこに沈黙していた。だが私の腕時計は動いている。とり散らかったものを足で払いのけ、次の間を見て回った。根太が腐り、床が沈んだ。風呂は五右衛門風呂で、台所も薪を焚くかまどだった。蛇口を捻ると、外でモーター音がして、茶色の水が出た。自家水をくみ上げているらしい。しばらくすると水は澄み、口に含んでも異味はなかった。ただ照明は点かなかった。ここで、私は何故か安心していた。そういえば、ロシュナンテのバックミラーは私を映していた。打ち捨てられたこの家の時間を私が動かし始めた。

我思う 故に我あり が哲学的認識論だけでなく、神学的、もしくは神秘学的意味をも持っているなら、意思が存在を証明する。自己認識としての意思ではなく、このゆがんだ空間に、唯一私のみが意思を持って存在するのなら、私が意思を失くせばこの空間も消えるのかもしれない。そんなことを思いながら、私は下の町に下りていった。

私は町で必要なものは全て手に入れた。それをキマイラに乗せて運んだ。廃墟の戸を開け、材料と工具を運び込み、作業を始める。歌が聞こえた。歌？私は口をつぐんだ。私が歌っていた。そして聞いているのも私。歌は神への祈り、だが私は祈らない。そう思いながらも私は歌ってしまう。

朝起きて山の水を飲み、下の町から運んできた食料を食べ、夜自分で風呂を薪で沸かして入る。朝また涙を流しながら目覚め、おなじことを繰り返す。家を直し、水場を直す。一日で出来ることなど高が知れてる。その間私は、狂気のような衝動に駆られることがなかった。しかし ここでは私は人ではなく、意思であり、存在であるにすぎない。美もなく、醜も善も徳もなく、悪はなせず、愛もない 存在 でしかない。その思いを頭の中で繰り返していた。人は存在するだけで 原罪を抱えているのなら、赤子のうちから殺されても仕方がない。悪なのだから。人は何かの役割を果たすために生まれてくる。ならば殺されるためにその赤子は生まれてきたのか。おさなごとは イエス のことではなかったか。彼は生き延びてゴルゴダの丘で殺された。殺し

たのは人、殺されたのは神の子。たとえ処女受胎であっても、彼も原罪を背負っていたのか……、とりとめもない思いが頭の中を流れて行く。私は歌っていた。ロシュナンテは動くようになっていた。

キマイラを駆って下に降り、足りないものを持って上がる。今日のキマイラには食料と本、種が乗っていた。家が一応直ったことで、私は土を耕した。草を抜き、石を除いて平らにする。畝を作り、本にある通り、種をまいて水をやる。

納戸にあった小麦らしいものを石臼で挽き、パンを焼いた。粉を水で練り、青竹に巻きつけて囲炉裏火にかざして自分のパンを焼く。軽い塩味のパンに涙が流れた。

私は案山子を作った。等身大の案山子を何体も作り、縁側、軒先、庭、野原に置いて名前をつけた。私の車にロシュナンテと名付けたように。もう一台はキマイラだ。

模造されたここにも、雨は降った。私だけに時間の流れるこの空間で、種子はどうなんだろう。花の種を撒き、とうもろこしの種を撒いた。日常を繰り返す、そんな生活をここで送った。

花が咲いた。とうもろこしが実った。ここでも種子は止めていた時間を動かした。

いい出来だ。あんた、素人らしいが上手だねえ。

見上げると日焼けした老人が立っていた。

メドウサの呪縛は解けた。メフィストフェレスとの契約は破棄された。

時間よ 止まれ と願ったのは私だった。